

(論文)

地域に視点を置いた教員養成に関する実践的研究

— 公民館と連携した社会科教育ゼミナールの取組を通して —

高橋 純一（環太平洋大学）

要 旨

本研究は、社会科教育ゼミナールにおいて地域住民の学びの場である公民館と連携した取組である「ワクワクスタディ」を実践することを通して、教師志望学生による学びの一端を明らかにすることが目的である。筆者のゼミに所属する教師志望学生らが、近隣の公民館において小学生を招いて「ワクワクスタディ」の実践に取り組んだ。その際、実践のプロセスにおいて、公民館職員のコーディネートにより地域の健康福祉委員や行政職員からレクチャーを受けたり、フィールドワークに出掛けたりしながら教材を開発する場面を設定した。学生らの「ワクワクスタディ」実践後の振り返りの記述を分析・検討した結果、この「ワクワクスタディ」の実践を地域に視点を置いた取組として継続的に実施したことにより、教員養成段階において求められる「地域教育協働力」育成に示唆を与える取組となったことが明らかになった。

キーワード：地域・教員養成・公民館・ワクワクスタディ

I 問題の所在と研究の目的

本研究の目的は、次の問いに答えることである。教師志望学生は、地域に視点を置いた取組を担うことで、どのようなことを学ぶのだろうか。その問いに答えるために、公民館と連携した社会科教育ゼミナールの取組を検討する。

教師志望学生の成長に関する研究には、大坂(2021)の研究がある。大坂(2021)は、社会科教育学の立場から教師志望学生を扱った研究を4つのカテゴリーに分類して、その特質を明らかにした。研究結果として、教師志望学生の専門性を付与する場として、教科の指導法(教育法)など大学の講義科目を対象とした研究が大半であると結論付けた¹⁾。

しかし今日において、新学習指導要領の柱の一つである「社会に開かれた教育課程」を実現するために、教師志望学生による地域社会での学びに焦点を当てた研究が望まれる。その理由は、学校教育が「社会に開かれた教育課程」のもと、地域との連携・協働を一層進めていくとともに、子どもの成長を支える活動に主体的に参画することが求められているためである。このことについて玉井(2016)は、教師の資質・能力の一つとして「地域と連携・協働できる地域教育協働力」を挙げ、

「養成段階の教師教育においても、地域協働を担える教師の資質と教師教育の在り方」を課題として指摘した²⁾。教員養成段階から、地域に視点を置いた取組を通して協働する力を育成する教師教育について実践研究することが今日的な課題となっていることを示している。

その点、教員養成段階における地域に視点を置いた取組を進める際に、桑原(2021)の研究が示唆的である。桑原(2021)は、教員を目指す学生が、「学校外の価値を実感し、それをふまえて学習を構成」できるために「学校外の社会に出て実践的体験的な学習」に取り組み、「良き市民」となることが重要であると指摘した³⁾。また、外山(1991)は、教員としてだけでなく「市民」の立場を獲得することを社会科教師の資質・能力の一つとして取り上げた⁴⁾。外山の論を踏まえ、小林(2021)は、「小学校教師はもとよりすべての教師一人一人が身につけるべきもの」だと主張したのである⁵⁾。

この地域と連携する取組の意義を踏まえ、筆者の社会科教育ゼミナールの活動の一環として、一定期間ゼミ生が地域に視点を置いた取組を経験するようにした。その取組内容は、大学付近にある地域の小学生を公民

館に招いて、「ワクワクスタディ」の実践を行うというものであった。授業実践の場が公民館であることから、学年を貫く授業テーマを「自治」と設定し、各学年の授業づくりの過程において、毎週ゼミの時間を定例ミーティングとして開催するなど、ゼミ生が公民館職員と協働で授業内容を策定するようにした。また、健康福祉委員や行政職員からレクチャーを受け、実践内容に活かすフィールドワークも同時に実施したのである。

そこで本研究は、社会科教育ゼミナールにおいて歴史的に地域住民の学びの場となっている公民館と連携した取組から、教師志望学生による学びの一端を明らかにすることが目的である。

II 先行研究の分析・検討

教員養成段階における地域と連携した取組と学生の学びに関する先行研究を分析・検討する。早くから地域との連携の必要性を説き、学生の学びの場を地域に求めてきた教員養成大学の一つとして、北海道教育大学旭川校（以降、旭川校）が挙げられる。旭川校は、教員養成大学における地域連携の意義について、「教員となることの意味付けを再構築・再確認する場⁶⁾」であると述べている。地域と連携する取組として学生ボランティアや必修科目の実践が挙げられるが、ゼミナールを主体とした地域連携の取組として、2つ実践事例について検討する。

まず、1つ目として家庭科教育ゼミが主に公民館等で年に1回程度実施している食育体験講座「はらぺこクッキング」の取組である。地域の小学生を対象に、調理体験を一緒に行うことが主な活動であり、特徴的なのは講座の計画から運営までを学生主導で行っていることである。また、安全・衛生面での配慮が欠かせないことから、ゼミ生は事前の予備実習を重ねて講座に臨んでいるのである。実際に参加したゼミ生の振り返りとして、子どもたちとの関わりから学んだことが紹介されている⁷⁾。

2つ目として、化学ゼミが旭川市科学館のブースにおいて演示する化学実験の取組である。ゼミ生は、子どもたちに科学の楽しさを体験させるために、年に1回開催している。ゼミの活動にも位置付けられ、その活動の中で実験を重ねているのである。実際に参加したゼミ生の振り返りとして、子どもたちと触れ合うことを通して学んだことが紹介されている⁸⁾。

以上のゼミ活動の実践事例から、両方に共通する点

は2点ある。1点目は、活動の場として公民館や科学館など地域の施設を拠点としていることである。2点目は、そこで実施される講座等に向けて学生が中心になって事前の準備を含め、計画的に進められていることである。以上の点から、「地域をフィールドとした教員養成の質の向上」⁹⁾に合致した取組と言えよう。

しかしながら、学生主体のゼミ活動を展開する中で、ゼミ生が地域の人々とどのように関わり、何をどう学んだのかについては述べられていない。ゼミ生の振り返りにも、子どもに実践して学んだことについては触れられているが、地域との連携を語るのであれば、地域の視点が必要である。地域連携の本質は、活動場所として地域の施設を活用することにとどまらない。ゼミ活動において、大学外の地域の人々と継続的かつ恒常的に関わり合う場面が設定されることによって、教師の資質能力の一つである「地域や社会の多様な組織等と連携・協働できる力」¹⁰⁾の育成にも繋がると言えよう。

III 公民館との連携を中心にしたゼミ活動の試み

今年度、筆者の社会科教育ゼミにおいて、大学校区内にある岡山市瀬戸公民館（以降、瀬戸公民館）との連携を一つの活動方針に掲げた。3年生ゼミ生12名が4月から集い、具体的に活動を展開した。内容は、瀬戸公民館に集まった地域の小学生に対して、ゼミの時間帯で授業を実践するというものであった。そのため、ゼミ生が地域の小学校の校内放送に出向いて参加を呼び掛けたり、公民館職員が作成した募集チラシを配布したりした。これらの取組を、学生と公民館職員とで協議し、文部科学省「地域未来塾」事業の一環^{註1)}として、「ワクワクスタディ！～社会科好きになろう～」と命名することとした。ちなみに、岡山市内において22公民館が「地域未来塾」を実施している。その内容は、大半が夏季休業や土日などを活用して、公民館において学生ボランティア等が集まった子どもの宿題を見たり、算数教室やプログラミング講座を実施したりするものである^{註2)}。今回、瀬戸公民館における「ワクワクスタディ」は、これまでの公民館での取組内容とは異なるものである。この「ワクワクスタディ」の取組を本格始動させたのは、後期に入ってからである。その実施計画は次頁にある表1のとおりである。

表1から、第1回から第3回までを「授業構想期」として、第3学年から第6学年までの社会科について、

各学年担当者を3名ずつ配置し、授業構想を入念に練る期間とした。また、第4回から第9回までを「教材準備期」として、各学年担当者らで、必要な教材及びワークシート等の準備の期間にあてた。さらに、第10回から第13回までの4回を「実践期」として、瀬戸公民館における「ワクワクスタディ」の社会科授業実践の期間とした。そして、第14回から第15回までを活動の「振り返り期」として、これまでの活動の反省を深めるようにした。次に、それぞれの期間の活動について検討する。

表1 2022年後期社会科教育ゼミナール実施計画

期	回次	日付	内容
構 想 期	第1回	9/13	オリエンテーション 後期活動の見通し
	第2回	9/20	瀬戸公民館副主査入矢裕一氏講演会公民館と教育力について
	第3回	9/27	授業テーマ確定 目指す子ども像の再確認
教 材 準 備 期	第4回	10/4	入矢裕一副主査と定例ミーティング
	第5回	10/11	入矢裕一副主査と定例ミーティング
	第6回	10/18	入矢裕一副主査と定例ミーティング
	第7回	10/25	小学校社会科授業参観
	第8回	11/8	各グループでフィールドワーク
	第9回	11/15	各グループでフィールドワーク
実 践 期	第10回	11/22	第3学年社会科授業 (瀬戸公民館)
	第11回	11/29	第4学年社会科授業 (瀬戸公民館)
	第12回	12/6	第5学年社会科授業 (瀬戸公民館)
	第13回	12/13	第6学年社会科授業 (瀬戸公民館)
振 り 返 り 期	第14回	1/10	授業を終えて振り返りの交流・協議
	第15回	1/17	次年度に向けて関係者との協議

(筆者作成)

1 授業構想期

第1回のゼミでは、「ワクワクスタディ」の実践を通して目指す子どもの姿について協議した。協議の結果、「子どもが社会科に興味・関心をもち、地域を再認識する姿」と設定した。それを受けて、学年を貫くテーマを「自治」と設定し、各学年における「ワクワクスタディ」の実践における目指す姿の段階について、学習指導要領を念頭に置きつつ、地域の実態や子どもの発達段階を考慮して以下のように描いたのである。

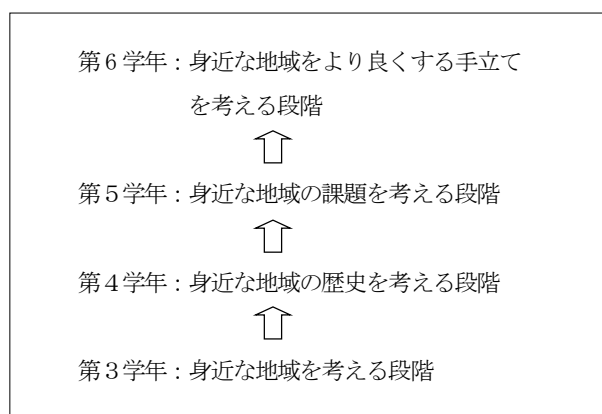


図1 「ワクワクスタディ」における目指す姿の段階

第2回のゼミでは、瀬戸公民館副主査入矢裕一氏をゼミに招聘して、「公民館は『〇〇科』なのかを考察するー公民館と教育力」というテーマで講演を依頼した。その講演内容の一部が以下の表2のとおりである。

表2 講演内容の一部

<p>【公民館の運営について】 →岡山市立公民館は各館1名「社会教育主事」を配置 →社会教育主事の職務を規定している社会教育法第9条3の解説 「専門的、技術的な助言」とは、「必要な教育方法・教育技術に関する知識等、教育に関する見識をその範囲に含む」とした。 →2007年に改正された社会教育法第9条第3項2について解説 「社会教育主事は、学校が社会教育関係団体、地域住民その他の関係者の協力を得て教育活動を行う場合には、その求めに応じて、必要な助言を行うことができる。」 社会教育主事と学校等教育機関との関係が明文化された。</p> <p>【令和の公民館の姿】 →地域住民や団体同士をつなげ、学校・家庭・地域の連携を促進するネットワークの形成を促進する役割</p>

(筆者作成)

講演を企画した意図は、本格的な活動が始動する前に、公民館において「ワクワクスタディ」を実施する意味や、今後、中心的に連携・協働する公民館職員の役割について把握することによって、社会教育主事でもある公民館職員とどのような関わりをしていくべきなのか見通しがもてるようにすることであった。この講演以降、さっそく第3学年から第6学年までの社会科の授業構想について、グループとなった3名だけで準備を進めるのではなく、公民館職員がゼミ活動に参画することによって、継続的に協働して授業づくりを行う体制を整えたのである。これらの一連の準備を経て、宣伝用チラシとしてゼミ生たちの考える授業案を一覧にしたのが以下にある表3のとおりである。

表3は、授業コンセプトに基づいて、各学年の授業名と大まかな内容についての一覧となっている。当初、学生たちは、各学年共通して「〇〇について知ろう」という表現にしようとした。それに対して、公民館職員は、「子どもたちに自分自身の地域について身近に感じ、

考える社会科を目指したい。」という思いを話した。そこで、学生たちは、第1回で思い描いた「目指す子どもの姿」に立ち返った。そして、「興味・関心」、「再認識」のワードから授業の内容をもう一度見直し、子どもが「身近な地域知り、自分事として考える」ことのできるような授業実践を目指そうとしたのである。

2 教材準備期

次に、第4回から第9回までの教材準備期の活動状況を、学年ごとに取り上げる。活動のプロセスにおいて、公民館職員を中心にしながら、地域の方々と触れ合う機会をもつようにした。そのことによって、どのように学生らの授業構想に変化をもたらしたのかについて、それぞれ表にした。まず、表4が、第3学年のグループの授業構想の変化を表したものである。

グループの学生らは、当初フィールドワークを実施することを考えていなかったが、公民館職員からの助言を受けて、公民館クラブ講座成果発表会に参加し、

表3 「ワクワクスタディ」(2022年)の授業案

日付	授業名	内容
11月22日	見つけよう！ 地域お助けスポット	瀬戸公民館の周りにある「公共施設」をグーグルマップやグーグルアースを使って探します。公共施設がこの地域のために必要な理由とは何かを考えてみよう！
11月29日	みんなで知ろう！ 地域の伝統文化	地域の伝統文化に実際に触れたり見たりしながら、その背景にある地域の歴史や昔の人たちがより良い地域を作っていた“仕組み”について考えてみよう！
12月6日	命を守ろう！ ～自然災害から身を守る… 地域の課題は？～	私たちが暮らしている瀬戸町やその周辺地域で起きた自然災害を知り、自分たちの力で災害から身を守るために、何が大切かを考えてみよう！
12月13日	Let's 選挙！ ～地域をより良くする仕組み「選挙」を体験しよう！～	実際の選挙と同じ投票箱などを使って、投票を体験してみよう！選挙権を実際に行使することが、なぜ地域をより良くする仕組みにつながるのかを考えてみよう！

(筆者作成)

表4 第3学年の授業構想の変化

<p>(1) 学生が当初考えた授業構想</p> <p>①Googleマップを使用して、瀬戸地域内の公共施設探索を行わせる。</p> <p>②公民館所有のPC6台使用、2人1組でパソコン使用する活動を位置付ける。</p> <p>③フィールドワーク（住民や施設職員への聞き取り）は予定していない。</p> <p>(2) 授業の流れに対する公民館職員らの意見</p> <p>①マップで施設を見つけて、その役割や目的などを教えるのか？何を教えるのか？</p> <p>②この地域の施設がこれだけある、それを覚えれば済みではなく、小学生の実生活に欠かせない役割を担っていることなど、「地域」を意識させるようにしてほしい。</p> <p>③「公民館」は何を担っていると説明していただけるのか？子どもたちに施設のことを聞かれて、施設の設定趣旨や目的をわかりやすく説明できるようにしてほしい。</p> <p>(3) 最終的な授業構想</p> <p>①公民館クラブ講座成果発表会を見学し、住民に身近な施設である公民館について理解し、説明できるようにする。</p> <p>②瀬戸地域になぜこれだけの施設があるのか、その理由について教材研究を重ね、指導案に位置付け実践する。</p>

(筆者作成)

公民館に集う個人や団体の方々と触れ合うことを通して、地域の人々が公民館をどのような思いで利用しているのかを理解しながら、実践に臨む必要性を考えた。実際、成果発表会にフィールドワークをした学生Aは、「自身がフィールドワークや自分で色々なことを調べる大切さを学んだ。授業の中で伝えたいことや子どもたちから考えを引き出す時に、しっかりと自分の中で明確な答えをもっていることで、(子ども)の支援がしやすかった。」と述べている。実際に公共施設を扱う中で、公民館に焦点化し、学生らが、地域の中でどのような活用が図られているのか、自身が公民館に足を運んで隅々まで調べ、地域の人々がどんな思いで利用しているのか調査し、教材化することによって、子どもに授業をする際に自信をもって臨むことができた。次に、第4学年のグループの授業構想の変化を表したのが表5である。

表5から、グループの学生らが、大学に隣接する瀬戸町郷土館の見学をし、市文化財課主査岡本芳明氏の説明を聴くことによって、授業において子どもたちに実際に見せたり、触らせたりする所蔵品を確定し、具体的に授業を構想できるようになった様子が窺える。実際に見学した学生Dは、「フィールドワークで東大寺の瓦に出会い、瀬戸の歴史のイメージがガラッと変わった。岡本(芳明)さんの解説があったからこそ、自分たちが子どもたちに実践するまでの知識を得ることができた。」と感想を述べた。また、地域の変遷について詳細にイメージするために、東大寺瓦窯跡のフィールドワークに出かけ、自ら教材開発に向けて動き出し、「ワクワクスタディ」の実践に向けて姿勢の変化が見られた。

次に、第5学年のグループの授業構想の変化について表したのが、次頁の表6である。

表6から、当初の授業構想では、どちらかと言うと、災害から身を守る方法に特化して授業を実践しようと考えていたのが、公民館職員の助言を得て、地域防災を担う福祉委員の方に聞き取り調査することの意味を再考し、子どもたちに災害に対する地域の人々の思いに共感させながら、授業を展開しようと変化している様子が窺える。実際、学生Gは聞き取り調査を実施して、「(柿崎由秀さんは)顔の見える繋がりや関係性が重要だと言うことを強く言っていました。災害時のいざという時に、近所に住んでいる人などの顔を知っていないと安否確認などに支障が出てくる。だから防災

表5 第4学年の授業構想の変化

- | |
|--|
| <p>(1) 学生が当初考えた授業構想</p> <p>①11月1日13時より、瀬戸町郷土館を見学する。市文化財課主査岡本芳明氏からレクチャーを受ける。郷土史に触れ、当時の人々がどのように生活を豊かにし、地域を豊かにしていったのかを子どもたちに考えて学ばせたい。</p> <p>②写真もしくは実物を見せる。</p> <p>③なぜできたのか、なんのためにできたのか、昔の人はどう使ってたかを考える。(グループ)</p> <p>④現代にも残ってるのはなぜ?を考える。</p> <p>(2) 授業の流れに対する公民館職員らの意見</p> <p>①郷土史を学び、そこから現在の「地域」にどう結び付けるのか大いに期待する。</p> <p>②小学生の目線にうまくフォーカスして、郷土史や民俗文化について触れるのが最もわかりやすいのか…当時の人々が創意工夫を積み重ねた結果、現在の地域を作っていることは理解できるが、なぜ創意工夫をしたのか、どのように創意工夫をしたのかをクローズアップさせて欲しい。(いわゆる「地方自治」「住民による地域づくり」の萌芽であるからゆえ)</p> <p>(3) 最終的な授業構想</p> <p>①市文化財課主査岡本芳明氏に当日の臨場を依頼する。その際、瀬戸町郷土館の所蔵品の一部「東大寺瓦窯」「石包丁」「石斧」などを持参していただき、実際に触ってみるなどの体験を盛り込む。</p> <p>②授業の流れをさらに作り込み、授業配布資料などの製作にも着手する。</p> <p>③東大寺瓦窯跡(東区瀬戸町万富)現地でフィールドワークを実施する。そのことを指導案に位置付け実践する。</p> |
|--|

(筆者作成)

訓練をしながら、集まって豚汁なんかを食べながら関係性を築くことも大切である」という内容が印象に残ったと話していた。このことは、実際に聞き取りを実施しないと見えてこないことであり、その地域の人々の災害に対する思いとして、子どもに伝えるべきことであると捉え、学生たちは実践に踏み出したのである。最後に、第6学年のグループの授業構想の変化を表したのが次頁にある表7である。

表6 第5学年の授業構想の変化

<p>(1) 学生が考えた授業の流れ</p> <p>①地域の安全な暮らしに欠かせない「防災」について学ぶ授業を作る。東区平島地区の平成30年7月豪雨被害からの復興支援について聞き取り、リアリティのある説明や課題提起をしたい。</p> <p>②日本の有名な災害をいくつか提示する。</p> <p>③地域の災害を提示する</p> <p>平島地区健康福祉委員会会長の柿崎由秀氏に聞いた話から、当時の様子を知ってもらい、自分たちにできることや対策について考える。</p> <p>④災害が起こった時の公民館の役割を知る。</p> <p>⑤災害グッズのクイズや紹介</p> <p>⑥自分の身を守るための心がけ</p> <p>(2) 授業の流れに対する公民館職員らの意見</p> <p>①防災を語る際に「自分の身を守る方法」をクローズアップするのか、地域の人々がどのように災害に向き合ってきたのかをクローズアップするのか、フォーカスの仕方に期待する。</p> <p>②実際に市民の方のお話を聞いてからにはなりますが、</p> <p>①の部分を決めておかないと、インタビュー内容もまとまらず、有益にはならないのでしっかりフォーカスして欲しい。</p> <p>(3) 最終的な授業構想</p> <p>①授業は、「地域の人々がどのように災害に「向き合ってきたのか」に焦点を当てて授業を実践する。そのような視点で、柿崎由秀氏にインタビュー調査を実施する。</p> <p>②地域の人々が、どう災害に向き合ってきたのか、その思いについて授業に盛り込むようにする。</p>
--

(筆者作成)

表7から、学生らは当初、漠然と模擬投票を実施することを授業に位置付けようと考えていたが、(2)の③にある助言を得て、子どもたちが経験している児童会選挙に着目して、それを基に模擬投票を実施するよう再構想したのである。あらかじめ3人の学生に候補者役をお願いし、選挙ポスターを準備、演説の時間を設け、一連の投票の手続きを踏まえながら臨場感のある環境を設定した。また、公民館職員の助言から、市選挙管理委員会副主査藤原健氏や市選管職員参事長谷川隆英氏との事前レクチャーの機会を得て授業構想が膨ら

表7 第6学年の授業構想の変化

<p>(1) 学生が考えた授業の流れ</p> <p>①地域をより良くする仕組みとして直結した「選挙」を学ぶために、模擬選挙の実施及び選挙制度について取り上げる。</p> <p>②選挙に対する基礎知識を把握する。</p> <p>③学習問題の見通しを立てる。「なぜ、投票率が低いのだろうか。」</p> <p>④マニフェストを紹介する。</p> <p>⑤投票箱・投票台・投票用紙を借用し、模擬投票を実施する。</p> <p>(2) 公民館職員らの意見</p> <p>①選挙によって地域がどう作られていくのか、明確に目標を立てて欲しい。</p> <p>②ただ投票させるのではなく、投票させるための動機付けも盛り込んで欲しい。</p> <p>③この授業のポイントは「何に対して投票させ」、投票の結果がどのように反映されて「地域づくり」をなすのか、それを明確に伝えることにかかっている。</p> <p>(3) 最終的な授業構想</p> <p>①選挙に対する子どもの基礎知識を把握する。</p> <p>②マニフェストを紹介し、児童会役員選挙の事例から模擬投票を行う。</p> <p>③投票の意義について考えるようにし、投票率が低い理由とその打開策について話し合う。</p>

(筆者作成)

み、模擬投票の中で実際の投票用紙を使用するなど、子どもに掴ませたいことを焦点化させていったのである。学生Jは、レクチャー後の感想として、「自分が気になっていた点は、1つ目として選挙に携わる人は、若者にどのように呼びかけをしているのか、2つ目として若者の投票率が低いことでどのような問題があるのか質問をさせていただきました。選挙に携わる当事者の方の意見と、自分が考えていたことを比較して、そこから授業作成にいかしていきたい。」と述べていた。実際に授業構想を見直す上で、公民館職員の助言だけでなく、事前レクチャーなどの機会も参考にすることが窺える。

3 実践期と振り返り期

ここでは、実践期と振り返り期について、学生Aか

ら学生Lまで総勢12名の授業実践に関する振り返りの記述を検討する。学生らの記述から、①「ワクワクスタディ」の授業実践に関する記述、②学校外の関係者への理解に関する記述、③学校外の関係者との関わりを通して学んだこと、④学校外の関係者との関わりから今後に生かしていくことの4点に分類して、分析・検討することとした。(傍線部分、筆者)

(1) 「ワクワクスタディ」の授業実践に関する記述

まず、子どもを対象とした授業実践から、学んだ学生たちの振り返りが以下のとおりである。

【学生Bの振り返り】

今回は週に1回1時間だけ会う児童や初めての児童などのように短い時間の中で、その児童に関して理解しなければならぬというようなところ(教育実習と)大きな違いがあった。私はこの経験から、児童の一つ一つの言動に集中して見るようになった。そうすることでより児童の特性や考え、興味があるものを短い時間の中で見つけることができるようになった。

【学生Cの振り返り】

地域の人々から学んだことを小学生に教えることを軸に活動した。公共施設、歴史、災害、選挙と瀬戸町にスポットを当てて、授業を行った。やはり、自分が住んでいる・生活している地域のことを取り上げると自然に興味を湧くことは、小学生から当然のことであることを認識させられた時間であった。

【学生Gの振り返り】

(学んだこととして) ICTを上手く活用する技術を生につけるといことです。私は、授業を進める際のスライドがとても重要だと考えます。なぜなら、スライドの質や出来具合で子どもたちの注目度や関心、授業に対する理解度が大きく変わってくると考えるからです。

【学生Jの振り返り】

時間内に理解させることを目的としすぎたため、本質の部分を見失っていたと思う。たとえ時間内に理解させることが出来なかったとしても、頭のどこかで疑問点が湧いていたり、考えるきっかけになることも授業の一つの立派な目的だと思う。…考えるきっかけをあたえることも一つの支援であると学ぶことができた。今後の模擬授業で、現場で活かしたいことを経験できた。

ここでは、4人の学生の振り返りを検討する。学生BやCの記述は、主に子ども理解に関する記述である。学生Bは、子ども個々に焦点を当てて理解しようとする姿勢の獲得について述べている。また学生Cは、子どもは、地域を教材として取り上げることで興味・関心を喚起することを、実践から学ぶことができたとして述べている。一方、学生GやJは、教育方法・技術に関する記述があった。学生Gは、実際の授業実践を通して、ICTを効果的に活用することの必要性を再認識した。また学生Jは、子どもの支援に関する新たな考え方を獲得していったことが述べられているのである。

(2) 学校外の関係者への理解に関する記述

次に、授業構想の過程において、関わった関係者に対する理解についての振り返りが以下のとおりである。

【学生Kの振り返り】

入矢裕一さんや選挙管理委員会の方をはじめ、公務員の方とここまで深く関わって話をしたり、同じ目標を目指して動いたりするのは初めてだった。そこで感じたこととしては、公務員の方は誰よりも身近なところで仕事をしているという事を感じた。以前まで私は公務員と聞くと、市民の事を考えるというより、公共事業や財政など少し自分たちとは少し離れたことを扱って仕事をしているようなイメージを持っていた。しかし、今回のように、公務員の方と関わる機会を経たことにより、市役所や公民館の方たちは誰よりも市民の事を考え、とても身近なところで仕事をされているんだという事を学べたと思う。

【学生Lの振り返り】

公民館の方々であったり、公民館の方が繋いでくれた方々(私たちであれば選挙の方々)、保護者の方々と実際に関わる機会が多くある中で私が学んだことは、公民館は幅広い分野で私たちの生活を支えてくれている仕事をしているのだと理解することができました。今回のように学びの場を提供し、私たち学校と学びたい意欲のある児童を繋いでくれたり、大学生と選挙管理委員会の方がコミュニケーションをとれる機会を作ってくれたりと様々な分野で活躍、支援してくれていると気づくことができました。このようなことから公民館に対して堅いイメージを持っていましたが、私たちの生活に必ずなくてはならない存在であり、幅広い分野で支えてくれるのが公務員、公民館の方の役目と言うことを学ぶことができました。

ここでは、2人の学生の振り返りを検討する。学生KとLは当初、行政職員に対してそれぞれ「自分たちとは少し離れたことを扱って仕事をしているイメージ」とか、「堅いイメージ」などを抱いていたが、「市民の事を考え、とても身近なところで仕事をしている」とか「なくてはならない存在」であるというように、自身の行政職員に対する見方・考え方を変容させたと述べているのである。このことは、授業構想の過程において関わり合いをもったことが背景にある。地域との連携を模索するのであれば、その地域の人々を知り理解することから始めなければならない。関係性の構築という意味においても、教師を目指す学生として重要な気付きを得ることができたと言えよう。

(3) 学校外の関係者との関わりを通して学んだこと

次に、授業構想の過程において、学校外の関係者との関わりを通して、学んだことについての振り返りが以下のとおりである。

【学生Aの振り返り】

後期のワクワクスタディの取り組みを通して、公民館の人やその他の関係者の方とのフィールドワークを進めていく中で、授業展開に様々な工夫を取り入れることができると学ぶことができた。…公民館の中を回って説明するという授業展開の工夫である。公民館のことを教える時には自分自身が知っておかなくてはいけない事から、自分自身の足を使って取材に出たり、分析をしたりと椅子に座って考えるだけではなく、外に出て教材を探しに行くということも教材分析には大切な事であると学ぶことができた。…授業を細分化して考え、より分かりやすい授業をするための方法を考える事で、子どもたち自身が考えやすく、発表しやすい環境を作ることができたと考えた。

【学生Eの振り返り】

ワクワクスタディを振り返って、資料館などに行くことで自分が体験して、その話ができるから伝えることが増えていくのではないかと考えた。また、公民館の方や郷土館の方などいろいろな方と授業を作っていくなかで、専門的な知識を持っている人の会話であったり、普段関わらない人と会話することで自分の中の価値観が広がったように感じた。また、大人との関わり方について学んだ。…これから社会で生きていく中で必ず必要になってくるものであるから、今回学んだことを活かしていかななくてはならないと考えた。

【学生Fの振り返り】

私が担当した東大寺の瓦では縄文時代や昔にさかのぼり地域のひとと協力して授業を行うことにより、身近に感じることもできますし本当にこんな風に実物を準備することもできなかつたと思います。楽しく授業を行うことができ、また地域の重要性に関して感じることもできました。瀬戸町という大学の地域で、大学においてこのように地域のひとと協力をして授業をするなど思っていなかつたです。しかし、自分にとって本当に視野が広がりました。

【学生Iの振り返り】

今回は5年生の授業づくりを通して教材研究の大切さを痛感しました。実際小学校で授業するわけではなかつたので学校教育と少し違う観点から授業づくりができることは…少し新鮮だったのではないかと思います。実際、災害を経験された方の話を聞けたり、昔の器やお金に触れたりできたことは学校の授業ではできないような授業であることを実感し、面白い授業で学んだこと、得たことも多かつたと思います。

ここでは、4人の学生の振り返りを検討する。学生AやIの振り返りから、フィールドワークを通じた教材研究や教材分析の必要性を学んだことが述べられている。特に学生Aの記述から、そのことが授業展開の工夫に繋がったと記述されている。また、学生Eと学生Fの記述から、学校外の関係者との関わりが自身の「価値観」や「視野」の広がりをもたらしたと述べられている。

(4) 学校外の関係者との関わりから今後活かしていくこと

次に、授業構想の過程において、学校外の関係者との関わりから、今後どのように活かしていくのかについて記述された振り返りが以下のとおりである。

【学生Dの振り返り】

郷土館でいうと、IPUの敷地内ですごく近い所にあるのに初めて中に入りました。近くにあるのに、行ってみれば役に立ちそうなのに、行ったことがないという施設が郷土館以外にもあると思うので、そういう施設を教育活動で活用しつつ、その際に地域のひとと関わることで、楽しいだけではなく、より深い学びへ、そして子どもたちの興味関心をもつ機会へと繋がっていくのではないかと思います。地域のひとに足を運んでいただい

て、実際に説明やレクチャーを受けながらなんていう時間は、今の教育現場では少ないように感じます。「社会に開かれた教育課程」の実現に少しでも近づくためにも地域の人と一緒に子どもたちを育てていくことが大切だと改めて思いました。

【学生Hの振り返り】

柿崎由秀さんのお話の部分は、子どもたちが興味を持って聞いてくれていたように感じた。このことから、地域の方からのお話を聞くことは詳しい話を聞くことができ、より正確な情報を伝えることができるし、子どもたちからするとより身近な話となり、教科書で行う授業よりも深い学びとなる可能性もあると感じた。…地域の方から話を聞くだけではなく、聞いた話から子どもたちに何を伝え、どんなことを考えて欲しいのか、授業づくりの時点で授業者が考えておく必要があるのではないだろうか。

ここでは、2人の学生の振り返りについて検討する。まず、学生Hは将来一教師として、授業構想段階における地域教材の開発・研究を進める際の教訓を学び取り、今後活かそうとしていると読み取ることができる。関係者から聞き取り調査を実施してから、その内容をどう授業内容に盛り込んでいくのか具体的に考えている。また、学生Dは、地域資源を活用することと併せてその関係者からレクチャーを受けることが、教師の教材研究の幅を広げるとともに、今後の教育の在り方として、子どもや学校が地域の人々と接点をもつことの必要性を獲得したと言えよう。

IV. 総合考察

本研究の目的は、社会科教育ゼミナールにおける地域に視点を置いた取組から、教師志望学生による学びの一端を明らかにすることが目的であった。本研究の特筆すべき点として3点について述べる。

まず1点目は、前章の(1)、(2)にあるように授業構想から準備段階において地域の関係者（公民館職員や行政職員、健康福祉委員）と関わり合う機会を設定したことである。公民館という場での授業実践という場面限りの限定された関わりを研究対象とはしなかった。本研究は、地域との連携を掲げている。現在、地域連携は「地域との関係者、団体と関わりながら、研究、教育、社会貢献活動を展開すること」¹¹⁾と定義されている。このことから、多くの地域連携の事例として挙

げられる長期休業や週末に限定した期間に公民館に子どもを集めて、大学生が関わるという一過性で終了する実践を超克する必要があると考えたためである。恒常的かつ継続的な地域関係者と関わり合うからこそ、教師志望学生にとっても意義のある活動となるのである。

また2点目として、前章の(3)①で取り上げた学生BやJの振り返りは、子どもの見方や支援に関わる記述がある。実際に、「ワクワクスタディ」で出会った子どもとの関係性に関わって振り返っているが、実際に公民館職員と授業後に短時間ではあるがリフレクションの機会を設けた。玉井(2016)は、専門スタッフの一人として社会教育主事を挙げて、「それぞれの子ども・家庭の状況に応じて、地域の専門のスタッフと教育活動を進めることで、多様な子どもにアプローチできる」¹²⁾と述べている。教員養成段階において、子どもの支援について公民館職員と連携することにより、今後教師を目指す学生にとって、授業力の基盤をなす指導力量が高まることに繋がると言えよう。

さらに3点目として、前章の(3)②③から、その授業の構想や準備の過程における地域関係者（公民館職員や行政職員、福祉委員）らに関する記述が見られたことである。具体的には、学生KやLに見られるようにこれまでの自身の職業観の変容であったり、学生EやFに見られる価値観の広がりであったり、総体として学校外との出会いによって、自身の在り方に良い影響が与えられたと捉えている。また、学生AやHは授業観の広がりとして、「授業展開の工夫」や「教材分析」、「教材研究」について記述されている。桑原(2021)は教員養成の立場から、「学校外の体験的、実践的活動が必要であり、教員としての資質を高めるうえで有効」¹³⁾と指摘している。このことから、教師志望学生は、地域に視点を置いた取組を通して、地域と連携することの意義を学んだのである。また、学校外の価値に触れて、獲得される教師としての資質能力の内実が明らかになったと言えよう。

V. 成果と課題

ここでは、本研究の成果と課題について述べる。まず、本研究の成果についてである。本研究の成果は、教師志望学生が社会科の授業づくりの過程で、公民館職員や健康福祉委員、行政職員との教材開発に向けた関わり合いをもちながら、継続的に連携・協働する場

面を設定したことである。教師志望学生は、取組の中から地域と連携する意味や意義を見いだしながら、自らの授業観を広げ、具体的に教材開発から分析・研究の一連の過程について新たな学びを得ることができたのである。また、自らの子ども観を問い直し、新しい子どもの見方や支援について気付きを得たのである。このことは、教員養成段階において求められる資質能力の一つである「地域教育協働力」¹⁴⁾ 育成に示唆を与える取組と言えよう。

次に、本研究の課題を2点述べる。1点目は、成果の検証が主に、学生の振り返りの記述を対象としたが、さらに学生へのインタビュー調査を実施するなど、より多角的・多面的に検証する必要がある。2点目は、「ワクワクスタディ」が本年度からの取組であるため、ここで明らかになった学生の授業観の広がりが、その後の学生生活の過ごし方にどのような影響を与えたり、現場の教師になってからどのように活かされたりしたのかの検証がなされていない点である。これらの点については、今後の筆者の課題とする。

謝辞

本研究を進めるに当たり、岡山市瀬戸公民館副主査入矢裕一氏には、資料提供等で大変お世話になった。この場を借りて、岡山市瀬戸公民館及び学生に関わっていただいた全ての関係者の皆様に心より感謝申し上げたい。

註

註1) 本事業は、文部科学省委託事業「地域未来塾」事業の位置付け、公民館職員と筆者とが本事業の進め方について定期的に協議するようにした。文部科学省, 2012, 「学校と地域の連携・協働に関する参考資料」, 文部科学省ホームページ, (2022年12月30日 取得, https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/giji/_icsFiles/afiedfile/2015/12/08/1365116_005.pdf)

註2) 第4回岡山市社会教育委員会会議運営要項資料を参照(2022年12月23日, 岡山市勤労者福祉センターにおいて開催)

引用・参考文献

1) 大坂 遊 (2021) 「教員養成カリキュラムで学ぶ社会科教師志望学生に関する研究の動向と特質」全国社会科教育学会『社会科教育論集』51, pp. 15-22.

- 2) 玉井康之 (2016) 「地域協働が求められる時代における教師の資質と教師教育の課題」日本教師教育学会『日本教師教育学会年報』25, pp. 1-2.
- 3) 桑原敏典 (2021) 「教員養成カリキュラムへの実践型社会連携科目導入の意義と方法—地域社会との対話を重視した授業の実践を通して—」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』177, p. 48.
- 4) 外山英昭 (1991) 「社会科教師としての資質と授業づくりの力量」日本社会科教育学会『社会科教育研究』64, pp. 46-47.
- 5) 日本社会科教育学会編 (2021) 『教科専門性をはぐくむ教師教育』東信堂, p. 20.
- 6) 北海道教育大学旭川校地域連携フォーラム実行委員会 (2013) 『地域連携と学生の学び—北海道教育大学の取り組み—』協同出版, p. 24.
- 7) 同書, pp. 216-223.
- 8) 同書, pp. 227-243.
- 9) 同書, p. 24.
- 10) 文部科学省, 2012, 「中央教育審議会答申」, 文部科学省ホームページ, (2022年12月29日取得, https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2012/08/30/1325094_1.pdf)
- 11) 野上真 (2018) 「わが国の大学における地域連携の動向と展望」『国際経営論集』55, p. 27.
- 12) 前掲書 (玉井, 2016), p. 43.
- 13) 前掲書 (桑原, 2021), p. 43.
- 14) 前掲書 (玉井, 2016), p. 36.

(2023年1月30日受付, 2023年5月10日受理)

竹谷出版学術ジャーナル『教育への扉』

第3巻, 第1号

発行日: 2023年6月12日

発行元: 竹谷出版 (竹谷教材株式会社出版事業部)